

別表第一

第二潜水艇隊号回航豫定航路表

針路変更位置	針路	目標
自 和田埼ノ南約四鏈	南七九五度西	淡路島最北○向進
神 平磯立標ヲ右舷見テ	正西	
戸 江崎燈台ヲ左舷見テ	南七五度西	五劔山南峯ニ向進
至 豈島大角鼻東角ヲ右舷見テ	西七〇度北	地藏埼九七八呎ニ向進
小 大福部島端塩谷鼻元ニ向進	北三〇度西	
巨 饒鼻ヲ左舷見テ	北三〇度東	
島 便匠鍋地ニ進ム		
地藏埼ノ南約半哩ノ所ニ於テ	西北西	
自 大魚嶋鐘崎ヲ左舷見テ	西微北	西微北

毎
往

小	男木島燈台ヲ左舷ニ見テ	南五十二度西	
豆	尾鷲島東端ヲ右舷正横裏	西三十四度南	男木島燈台ヲ艦尾ニ保テ
島	大槌島頂ヲ右舷ニ見テ	西微南三十二度南	上二面北島ニ向進
粟	小咲島及櫃石島ノ各北東端ニ線	北八九度西	塩飽島六六七呎ニ向進
島	塩飽島甲生浦ヲ右舷ニ見テ	南六十二度西	高見島神宮森ニ向進
北	塩飽島ノカブラ埼トツノノ鼻 東止ニ線	西三十四度南	小嶋頂ニ向進
鋪	波節岩ヲ九船前約三三ニ見	南六十四度西	高見島板持鼻ニ向進
地	廣島ノ埼ト中島亦鼻ニ線	南八十二度西	六島頂ニ向進
	小舟島西端ヲ右舷ニ見テ	西南西	廣島ニドツ鼻艦尾
	下二面島中央ヲ九艇ニ見テ	南西	
	紫雲天山東ノ松林ト箱崎ニ線	南東七十四度東	吉津山ニ向進
	便回粟島北端ニ進ム		
	西栗島鋪地西口中夾	北西七十四度西	吉津山艦尾

白	粟島北端ト高見島神宮迄一線	北七四度西	城山艦尾
栗	百島五。八吹△ヲ右艇ニ見テ	北西微西	
島	八重子島ヲ南西ニ見テ	北西	岩子島北西岸向ノ
鋪	大濱崎燈台ヲ左艇ニ見テ	北五七度西	笹島南西端ヲ艦尾
地	依木島四松五七長夫丈礁一線	北八七度西	犬吠山ニ向進
至	小細島ト宿根島峯頂ヲ一線	南々西	高根真觀音山ニ向ノ
小	青木鼻東南ヲ右艇ニ見	南西微西ニ西	
部	瓢箪島北東端ト生口島南西端一線	西南南西	
湾	神殿島西端ト大横島東端一線	南四五度西	神ノ峯ニ向
	大島北東端ヲ右艇ニ見テ	南々西	
	大三島ヲ右ノ鼻九艇ニ見テ	南三〇度西	エイリヨウ山ニ向進
	根取崎ヲ左艇ニ見テ便宜小針鋪地ニ向ノ		
	註潮勢ノ様ニ依懸瀬ヲ迂回スルヲアベシ		

毎 日

橋	至	原三白		島	宮	至	湾	部	小	自	小部
小館嶋ヲ右舷正横ニ見テ前傍ニシテ金橋ニ至ル	齊島西端ヲ右舷ニ見テ西南西	三原瀬戸ヲ急流ノ鼻ヲ左舷ニ見テ南西ニ西	便宜錨地ニ向テ	小黒神島北端右舷正横北ニ六度西 甲島頂ノ船尾	大黒神北西端ノ巖島中村ニ線北ニ七度西 岩島九八六呎頂ニ向進	鍋島ヲ右舷四鏈ニ見テ北ニ五度西 白石立標ニ向テ	横島北東端ヲ右舷ニ見テ北ニ四度西 羽島北端ノ歌崎山ニ線	小島頂ヲ右舷ニ見テ倉橋島ノ南ニ向テ	大館嶋頂ヲ右舷約四鏈ニ見テ西微北 小柱島ニ向進	大蘆小蘆ノ約中央ヲ通過スルヲ西微南ニ南	小部錨地ヲ

自	小黒神島頂ヲ右艇ニ見テ	北東 ^北 北	大那沙美信子村ニ向テ
倉	巖島山頂ヲ左艇ニ見テ	北 ^北 七 ^七 度 ^度 東	似島南端ニ向テ
橋	守東島ヲ右艇ニ見テ	北 ^北 七 ^七 五 ^五 度 ^度 東	中ノ瀬、立標、艦尾
至	屋形峯ヲ右艇ニ見テ	南 ^南 東 ^東 八 ^八 度 ^度 東	大巖女東端ト土浦崎一線
吳	便直吳ニ向テ		
自	石燈籠、北方約四鏈	東 ^東 北 ^北	金輪島五五三峯頂ニ向テ
至	似島北東端右艇ニ見テ	南 ^南 東 ^東 激 ^激 東	
吳	時島南端ヲ右艇ニ見テ、表針前訖航路ニ入り吳ニ向テ		
備考 本表針路表換ノ位置ハ母艦ノ回轉圈(轉舵十五度)			
一 基キ定メタルモノナリ又潮流及風ノ方向強弱如何ニ			
依リ豫定航路ヲ偏逸セシ場合ハ臨機ノ針路ヲ撰ル			
一 アニシ			

海軍

別表 第二

第三航路 船隊自神戸港至吳軍港回航諸規定
第一 豫定碇泊場

日定	碇泊場	碇泊場間距離
第一法	第一法	第一法
第二法	第二法	第二法
第一日 小豆島		五 四
第二日 粟島北錨地		四 一
第三日 小部	三原	五 三
第四日 宮島	倉橋	四 五
第五日 吳	吳	一 五
		三 八

第二航海序列

(備考)

天候等都合上三原碇泊時倉橋列を先航す

母艦

第七

第六

第二吳丸

約一千ノット

第二吳丸

常

第三曳航序列

母艦

第七

第二吳丸

第六

約一千ノット

第四航進速力

曳航場合航速ノ速航速力九ノ如シ

原速

八哩

半速

六哩

ノ速

四哩

危急ノ場合外ハ速力ヲ超過セシメテ航行ス

独力航行中航速力ヲ七ノ速乃至八ノ速トス依テ母艦航速ノ注意ノ通

ナル加減ヲナシ常ニ先頭ニ在ルヲ要ス

第五 突航中曳索ノ當番

母艦ノ副直將校若クハ准士官ノ監督下ニ相當ナル兵員ヲ曳索ノ位置

ニ母艦ニ必要切斷用ノ斧ノ備フ
第六 突航中曳索ノ當番
第七 突航中曳索ノ當番
第八 突航中曳索ノ當番
第九 突航中曳索ノ當番
第十 突航中曳索ノ當番

第六 突航中艦ノ準備

突航中艦ハ電力航走ノ準備ヲナシ置クヲ要ス

突艦 被曳艦 見約信号






信号旗 意味 行動方







突航ヲ要ス 突艦ハ速カニ被曳艦ニ近ツキ曳索ノリールビラ

インレヲ船速ヲ曳航準備シナス

艦員準備成ルハ電燈旗ヲ母艦ニ報ス

				
速カヲ増セ	速カヲ短メ	曳索ヲ縮メ	曳索ヲ伸セ	曳索ヲ伸セ
<p>曳船ハ速カヲ増シテ半速トナス 全信ヲ操速ニ母船ハ速カヲ増シテ半速トナス</p>	<p>曳船ハ速カヲ減シテ半速トナス</p>	<p>子ヲ高ク揚グル見テ之ヲ止メノ固定ス</p>	<p>曳船ハ速カヲ減シテ半速トナス 曳索ヲ伸セ被曳船ハ速カヲ減シテ半速トナス 曳索ヲ伸セ被曳船ハ速カヲ減シテ半速トナス</p>	<p>曳索ヲ伸セ被曳船ハ速カヲ減シテ半速トナス</p>

				整備第一航
航路注意	危険中汽船運 声加フ	航路力航運	運轉自由	今速力航行 セヨ(ス)
	航路力航運 航路力航運	機 航路力航運	航路力航運 航路力航運	當ト思考ル此ノ信号ナラバ 航路力航運

<p>身航ヤカム 又旗一梳</p>	<p>身航ヤカム 整備旗一梳</p>
<p>我軍獨鋪地 二進々</p>	<p>潜水艇横付 シ差支ナシ</p>

1262

別表 第三 自西島至内海(安田)豫定航路表

針路表換位置 針路

西島 座標 北約四鍊 西微南 西南

座標 北八二度西約八鍊 南微西

水子岩 北六六度西見テ 南 西

フコ島 船正横見テ 南七四度西

大角鼻 南五三度西一厘ノ 西 北

大福島 船正横 北 西 東

権現埼 九ノ吹ノ山 船正横 北 東

大崎 船正横 北 東 東

ウシ 船正横 東 北 東

海軍

回航記事

第二吳丸

1264

明治三十九年
六月六日

第二吳丸潜水艇ヲ神戶ヨリ吳軍港ニ回航報告

豊橋艦長ヨリ第二吳丸指揮ヲ命ゼシ川崎造船所附

近ニ碇泊セル全船ノ乗船ス之シヨリ先チ第二吳丸ハ吳軍港

ヲ發シ数日前神戶ニ到着シ付リタルモナリ

今 七日 豊橋艦長ヨリ尤ノ命令ヲ受領ス

香取第二吳丸指揮ニ喫ルン命令

一、貴官ヲシテ第二吳丸ノ指揮ヲ辱ラシム

二、第二吳丸ハ本職ノ指揮下ニテ豊橋ト共ニ第二潜水

艇隊ヲ吳軍港ニ回航スルニ任務ヲ有ス

三、第二吳丸ハ本日午前八時豊橋及艇隊ト共ニ當港出港

々外ニ於テ第六潜水艇隊航海ノ實施及ビ之ト規約信

号ノ實際ヲ行ヒ其結果ヲ本職ニ報告スベシ

毎

頁

四、第三ノ實驗ヲ終ルニ豊橋ト共ニ兵庫ニ帰港シ豊橋
ト通信連絡ヲ保テ得ル距離以内ニ碇泊シ余ヲ待ツ
但シ汽釜ハ汽力ヲ保ツニ及バズ

明治三十九年六月七日 於兵庫港

白井豊橋艦長

午前八時潜水艇曳航實施ノ爲ノ神戸港外ニ出テ本船
ハ第六潜水艇(司令艇)曳航ヲ實施ス其實験要領尤
如シ

一、曳索ハ稍、古キ五吋ボイサーレヲ使用シタリ

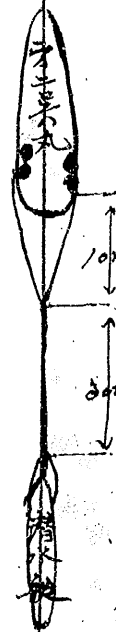
二、曳索ハ圖ノ如ク一條ハ右舷船尾ヲスプリングボイサーレ

ヲ約四十米突出シ其外端ニワイレヲ造リ之ヲ潜水艇

首ノストロップニモスリツプロトガルヲ以テ留ム、而シテ船尾

リ約十米突出部ニ於テ左舷船尾ヲスプリングボイサーレ

ヨリ出せん他ノフホーサーレヲ以テスパンレヲ造レリ、其内
端々之ヲ兩舷ノボルラード（ツド）ニ捲キ留ム



此作業ハ停止セル潜水艇ニ本船ヲ併接セシメテ行ヒタリ
三之レニ於テ本船ハ前進ヲ起シ微速洋速原速（八速）ニテ
曳行シ取航面航ニ五度十度十五度二十度廿五度
三十度各一回宛試ミシニ廿度迄ハ被曳艇ニ格別ノ無理ヲ
感ゼザルモノ、如クナリシモ取航一杯ニテ試ミシニ予々無理ノ張
カヲ及ボスモノ、如クナリシモ直中^{直中}中止セリテ實際ニ於テ曳艇
ニハ何レノ航角ニテモ回頭ニ困難ヲ感ハルコトナク曳艇ハ
ノ長サニテ常ニ水面上ニアリ被曳艇ハサシモ曳行運動スル
ナリ具合頗ル良好ナリキ日規約信子ハ一更ニ改正スル必要

毎

一

き認ノズ

午前九時半以上ノ實験ヲ終リ潜水艇ト離ル豊橋
モ亦實験ヲ終リ單獨兵庫錨地ニ向ヒツアリ認ハ時
葉七潜水艇ハ尙ホ港外ニテ本船ハ司令艇ノ信号
ニテ港外ニ停止セテ号艇ノ歸港ヲ俟ツ然レモ全艇ハ
艇ヲ要ストノ信号ヲ掲ゲツ、微速進行ニ来リシヲ以テ本船
ハ直チニ全艇ニ接近セントシタリ、會ニ造船所ノ曳船来ニ會
シ即チ本船ハ單獨兵庫錨地ニ向ヒ午前十時三十分豊橋
錨地ノ近傍ニ投錨ス

今日 豊橋艦長ヨリ九ノ訓令ヲ受領ス

本回航中第二号丸ハ九ノ諸項ニ遵ヒ行動スベシ

一 出港時潜水艇隊ハ豊橋ノ出航前三十分ニ解纜
出港スニキテ第二号丸ハ艇隊ト其行動ヲ共ニスベシ

第10

二入港ノ時豊橋ハ艦隊及ヒ第ニ吳丸ニ先テ單獨入港

スベキヲ以テ第ニ吳丸ハ艦隊ト其行動ヲ共ニスベシ

三前ニ項ノ場合及ヒ之ニ準ルル場合ニ第ニ吳丸ハ特ニ艦

隊保護ノ任務ヲ有ス

明治三十九年六月八日於兵庫港

白井豊橋艦長

今九日午前七時廿五分出港豊橋ニ随從シテ明石瀬戸ヲ

通過ス

航行序列



午前十時頃風向南東ニ変ジ其風力次第ニ増加シ波

浪亦漸リ高マリ来リ船ハ横波ヲ受ケテ動揺甚カシク激

浪下甲板ニ打テ込ミ刺ヘクテラツクニニ收置セテ傳馬船及

ヒライフボートニ備ヘテ傳馬船ハ動揺ト激浪ノ爲ニ補

モスレバ取り去ラレントシ船体ノ傾斜五十度以上ニ及ビ殆ド
 顛覆セシム有様ヲ呈セリ、之ニ於テ本船ハ船ノ危険ヲ
 顧慮シ速カラ緩ノ船ヲ風波ニ逆ハシムル目的ヲ以テ南方
 ノ針路ヲ取レリ之ノ時豊橋ノ停止シ第六潜水艇ハ單獨
 激浪中ヲ南方ニ向テ疾走スルヲ認メタルヲ以テ本船ハ極
 力同艇ニ隨行セント欲シ全速ニテ同艇ニ跟隨セリ、然
 ルニ本船ハ風波ノ多ノ操航速力共ニ意ノ如クナラス稍モ
 スレバ艇ヲ見失ハントシワ、アン間ニ艇ハ又及對ノ針路ヲ取
 リタルモノ、如ク本船ト益々遠カラントセリ、コノ時豊橋ヨリ回
 ヲレノ信號アリ即チ針路ヲ轉ジテ豊橋ノ近傍ニ至
 リシ片時大潜水艇ハ激浪ニ洗ハレツ、停止セルヲ認ム
 仍テ本船ハ全速カラ以テ第六潜水艇ニ接近シ曳索
 ヲ全艇ニ取り糺ナリ曳航ヲ開始セリ時、午後、時三十五分

此時豊橋の岸に潜水艇が現れ、會せしかば本船の之に隨
從航行せり

午後二時三十分男鹿島と家島との中間水道の入口に於て被
東艇を首ノスリボトグに被テ艇ト分離シタルヲ以テ直チ
曳索ヲ揚ゲ船ヲ回轉シテ再び曳索ヲ同艇ニ取リ航行ヲ
繼續セリ、水道ヲ通過シ終リタルに於テオセテ艇ハ母艦ヨリ廣
シ獨力航行スルヲ認ム

午後三時四十五分被東艇ヲ放チ單獨西島錨地ニ向ヒ
全四時五分豊橋ノ近傍ニ投錨ス、コノ時豊橋ヨリ電
報打チ方ノ命令ヲ受ケテ全五時七分被東艇播州坂越
二向フ

全五時四十分坂越着使命令ヲ果シ六時三十五分坂越發七時
三十七分西島錨地ニ停着復命令ヲ豊橋ノ近傍ニ投錨ス

<p>今日十日 午前八時二十分西島錨地癸今九時十分第六潜水艇</p>	<p>ニ東索ヲ取り曳艇ヲ開始ス命ニヨリ豊橋ニ先子小豆島</p>	<p>ニ向リ今十一時ノ子島附近ニ於テ豊橋ニ追ヒ越サレ之</p>	<p>レヨリ豊橋ニ随従小豆島内ノ海ニ向リ</p>	<p>午後〇時十五分第六潜水艇ヲ放テ單獨錨地ニ進ム</p>	<p>今四十五分内海豊橋錨地附近ニ投錨兵員ニ日没</p>	<p>正午船上陸ヲ許ス</p>	<p>今日十一日 午前七時五十分出港兩潜水艇モ亦殆ンド同時刻ニ母</p>	<p>艦ヨリ離レ出港ス即チ本艦ハ潜水艇ハ尾シテ湾外ニ出シ</p>	<p>トス時ニ母艦ヨリ「吾レ防舷物ヲ落下シタル故出港少ク遅ル</p>	<p>トノ信号アリ仍テ之ヲ各潜水艇ニ傳フ司令艦ヨリ「五ニ母</p>	<p>艦ノ来ルヲ待タズ微速ニ航行ス故絶エガ注意セラレシト</p>	<p>信号アリ仍テ速カラ緩メ兩潜水艇ハ尾シテ粟島ニ向リ</p>
--	---------------------------------	---------------------------------	--------------------------	-------------------------------	------------------------------	-----------------	--	----------------------------------	------------------------------------	-----------------------------------	----------------------------------	---------------------------------

午前十時五十分大槌小槌両島間ヲ通過シ終リ午後
 方ヨリ三隻ヨリ成ル艦隊ヲシキモノ来ルヲ見ル直チオ七潜水
 艇ニ此旨ヲ通知シ艦隊ハ過般神戸港ニ碇泊シ居リ未
 國臣細亞艦隊旗艦オハイオ(司令長官ヲシテ多將彦業)外
 ニ隻ナル一ヲ知ル時ニ母艦ハ防艦物ノ搜索ニ多クノ時間
 ヲ費シタルモノト覺シテ未ダ其隻影ヲ見テ認ル一ヲ得ズ
 午後。時五十七分司令艇ヨリ「栗島南錨地」行ケニ艇共其
 船ノ艦ニ繫グヘトノ信ヲアテテ本船ハ速力ヲ速メテ單獨
 栗島南錨地ニ進ミ午後一時四十分航海学校ノ東南約
 ニ鏈羊ノ処ニ投錨潜水艇繫留準備ヲ為ス
 二時五分第六潜水艇獨力接近シ来リ吾カ船尾ニ繫留ス
 オ七潜水艇ハ本船ヲ距ル一鏈ノ処ニ投錨若シ母艦ハ港
 ヲ待リ、午後二時三十分豊橋ノ入港ヲ認ム今三十分豊

橋投錨、其船に電報打方及び買物ノ爲ノ子度津に
 送ル其用意セヨトノ信子アリ、六子船ヨリ離レ
 方七ト共ニ母艦ニ横付ス即チ本船ハ午後三時余ヲ含
 シテ子度津ニ向ケ出港左三時四十三分ヲ度津著人
 負ヲ派シテ打電方及ビ糧食買入ニ趣カシム今八時五
 分上陸負帰船直チ抜錨粟島ニ向テ時ニ豊橋ニテ
 探照燈ヲ点ジ本船ノ帰港ヲ便ニセラン今九時十分粟
 島著豊橋ノ附近ニ投錨シ傳馬船ヲ卸シ人負及ビ糧
 食ヲ豊橋ニ送り復命ス

今月十二日午前九時二十五分打電方及ビ豊橋ノ退艦者卒一名
 ヲ須田ニ上陸セシムル目的ヲ以テ豊橋ニ先ガキ粟島錨地
 ヲ突ス今廿七分粟島ノ陸岸ニ近リ進航ノ際誤テ六船
 錨ヲ投下ス人負及ビ船体ニ何等ノ故障ナリ直チニ

揚 錨 須 田 向 ノ 十 時 十 分 須 田 沖 へ 投 錨 使 命 果 止 全
 三 十 五 分 須 田 ヲ 祭 止 津 外 へ 向 ノ
 十 一 時 二 十 分 豊 橋 ノ 通 跡 へ 入 り 豊 橋 ヲ 其 船 停 止
 潜 水 艇 東 方 方 ノ 用 意 ヲ ナ シ 置 ヲ 可 シ ト ノ 信 子 アリ 仍 今
 ノ 如 ク ス 午 後 三 時 五 十 分 母 艦 ヲ 各 船 艇 へ 豫 定 更 更
 シ 岡 村 島 北 へ 碇 泊 止 ト ノ 信 子 アリ 四 時 三 十 分 母 艦 ノ 停 止
 投 錨 ス
 今 月 十 日 午 前 七 時 廿 五 分 岡 村 島 錨 地 祭 止 七 時 五 十 分 西 潜 水 艇
 尾 航 シ テ 大 下 瀬 戸 ヲ 通 過 ス
 今 九 時 四 十 二 分 豊 橋 ノ 航 跡 へ 入 リ 航 行 柱 島 水 道
 へ 入 り 今 十 時 四 十 分 才 七 潜 水 艇 停 止 シ 本 船 へ 五 機 械 故
 障 アリ 暫 止 其 位 置 へ 待 止 止 シ ト ノ 信 子 ヲ 為 下 仍 本 船
 八 時 船 ノ 用 意 ヲ 整 正 今 般 二 近 接 ス 以 時 先 頭 二 船 間

<p>母艦ニ第七潜水艇ノ故障アリ知リ左ニ回頭シテ全艇接 近セントス本艇ハ七号艇ニ東航ヲ西スルヤト問ヒシニ故 障直リリ今ヨリ獨力ニ航行ストノ答ヲ得ルヲ以テ直 チニ母艦ニ此旨ヲ通ズ即チ母艦ハ原針路ヲ取り潜水 艇及ヒ本艇ヲ追ヒ越シ先頭ニ立チテ宮島ニ向テ午後 一時三十七分本艇ハ兩潜水艇母艦ニ横付ケシタルヲ見テ 豊橋ノ傍ニ投錨ス</p>	<p>夕食后兵員ニ手艇上陸ヲ許ス</p>	<p>本月十四日午前七時五十五分兩潜水艇ト共ニ宮島錨地奈潜水 艇ニ尾シテ吳ニ向テ入港ニ先チ豊橋艦長ヨリ信ヲテ 其艇ハ投錨ト今時ニ本職ノ指揮下ヲ離レ所屬ニ 復歸スベシ</p>	<p>今回回航ニ就テ兵員一同、一方ヲテガル傍ヲ謝ス</p>
--	----------------------	---	-------------------------------

尚ホ港務部長へハ本職ヲ更ニ此旨ヲ報告スルアラントス
次ヲ井出司令ヲ

永シノ傍ヲ謝ス

トノ信トアリ

午前十時十五分吳ニ歸著ス

明治三十九年六月十四日於吳

豊橋乗組 海軍少尉 香取末吉

海軍

1277

回航ニ
關スル
意見

1278

回航ニ關スル諸意見

第一 曳索

一、七吋「マニラ」ロープハ曳索トシテ其堪力充分ナリ海上平穩ナル時ハ之ヨリ一層取扱ニ容易ナル五吋「マニラ」ロープニテ充分ナルベシ

二、七吋「マニラ」ロープハ曳索ハ長サ百五十米突ヲ以テ適度トス但し海上波浪アル中ニ百米突以上ヲ出スヲ要ス

三、艇首ノ「ストロップ」ニ通フスベキ曳索ノ端ニ「ボーライン」ニシテ以テ長サ三米突ニ及ブ「アイ」ヲ作り使用シタルタメ此節ハ波浪ニ激スルヲ免カレズ又「アイ」ノ過長ナル為メ速カノ減ズル時若シクハ停止スル片ハ「トケル」脱出ノ虞アリ故ニ「アイ」ス「アイ」ス「アイ」ヲ以テ長サ約一米突ノ「アイ」ヲ作り之ニ引入ニ使テラムル為メ三四米突ノ「セン」ニツト「ヲ」附セバ良果ヲ得ベシ（曳航スル

時機少ナリ之ヲ實験スルヲ得ザリシ

四、曳索ヲ艇ニ取ルニ艇ノ進退シ得ル限リ、艦尾ヲ曳索ヲ下シ

艇ヲシテ之ヲ抹ラシムルヲ最モ良シトス然レモ此の場合又海上波頗

ル高キ時、端舟ヲ以テ曳索ヲ揮擲スルノ外良策ナシ

五、海上波アル中、港外ニ出ヅル前曳索ヲ取ルヲ良シトス若シ港

外ニ於テ之ヲ行フ時、艇尾ニ波浪ヲ受クル時ト云ハ艇ノ前部

ハ激浪ニ洗ハルヲ以テ作業ニ困難シテ危険ナリ

第二 曳索艦船

曳索艦船ニ操縦容易ニシテ充分な凌波性ヲ有シ尚ホ必

要ニ應ジテハ高速力ヲ出スヲ得ルモノヲ希ニ可ク即チソーニクロート

型ニ駆逐艦ハ適当ナルモノト認メラル若シ又之ヲ得ル能ハザル時ハハル

マン型一等艇ヲ以テ代用セシムル事ヲ得ベシ本艦、如キ操縦不便ニシ

低速力ノ大艦ハ、狹水道又ハ流潮アツク地ニ於テ、満足ナル行動ヲ
 ナス能ハズ又薄ニ吳丸ノ如ク低速力ニシテ波浪ニ堪ヘザル船舟ハ唯
 僅カニ流潮ナキ平波上ニシテ用フルニ足ルベキナリ而シテ本艦ノ如
 ク母艦ノ任務ミアンモノハ單ニ動力兵器及需品ノ補給ニ任ジ専航
 ノ如キニ隨伴ノ小艦艇ニ任スルヲ以テ良策アリト思考セラル

第三航 行序列

豫定ニ依リバ保護専航ノ任務ヲ有スル艦船ハ、艦隊ノ前後ニアル
 者ナリシモ艦隊出港後之ニ使用スル重量一噸餘ノ防艦物
 四個ヲ收納スルガ為メ多クハ豫定ノ航行序列ニ就ク能ハズシテ
 艦隊ノ後尾ニ續航センガ為メ便宜ヲ得シトサカラザルノコトナク
 却テ艦隊ノ後尾ニ隨航スルヲ有利ナリトス何トナレバ先頭ニ達
 シワ、アンニ際シ艦ノ何レカ故障ノ生カル片ハ任務上回頭ノ必要ヲ

見ルべし此動作タルヤ廣濶ナル海面ニテリテリ顧慮スルニ危ラスト
虽也流潮アル狭水道又ハ船舶ノ多キ所ニ於テリ之ガ為メ多ク
ノ時間ヲ浪費スルノコトナラズ此動作ヲ企図セルガ為メ自己ノ危
険ヲ醸スヤモ知ル可ラズ寧ろ艇隊ノ後尾ニ隨航シ常ニ其行
動ヲ監視シ要スルバ直進其急ニ應ズルノ容易ナルニモ甚カザリ

第四 規約信辨

規約信辨ニ関シテ其欠点ヲ奏見セズト虽モ出来得レバ識別
シ易キ小數ノ旗梳ヲ使用スルヲ以テ有利ナルベシト信ズ

横領第三〇號一七八

歷山丸授受結了報告

汽船歷山丸六月二十九日入港即日授受結了候
旨横領賀海軍港務部長鹿野勇之進
ヨリ届出候条決段及報告候也

明治三十九年六月三十日

横領賀鎮守府司令長官上村彦之丞

海軍大臣齋藤實殿

(明治三十九年)

1283

史書

案
格
所
火
之
軍
六
格
所
火

海
道



案

歴山在、件、年七月七日、申、被、斬、了、录、由
那、考、隊、所、隊、セ、シ、ス、ト、セ、バ、如、可、九、工、事、ヲ、要、也、ヤ
又、可、程、共、用、ノ、要、也、ヤ、考、者、松、後、上、工、事、方、案、
并、概、美、系、調、分、七、月、五、日、取、臨、本、部、七、日、折、以、突、工
部、也、申、進、乞、及、以、解、了、知、程、成、否、因、考、事、申
匪、及、也

辛酉年七月九日

伊藤大佐

松村大佐宛

謹啓

歴山丸ノ一ニ付テリ未ダ何等ノ通知無之工廠
検査官モ未ダ全ク知ラザル模様ニ有之ヨ
恐レ入リ候場共其成リ行キテ御通知ヒ
下候得者幸不過之候

敬具

七月七日

松村 少佐



伊藤軍務局長 負殿

臺灣

郵員



橫領第二三三號ノ二

歴山丸ノ形母艦トシテ使用致
 度者杉村第一潜水艇隊司令ノ意
 見ニ依リ其ノ設備ヲ持シ得ルヤ否ヤ
 目下取調中ニ有之候處港務部
 長ヨリ別紙寫ノ通リ上申有之候
 付テ其ノ用途ニシテ目的ヲ達スル
 場合ニハ汽走小艇トシテ使用ノ事
 ニ致シ度希望ニ有之候者請考
 考査ニ此段申進候
 〆

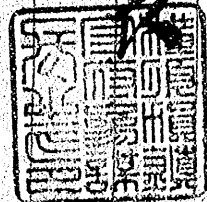
明治二十九年七月七日

第...号

七二

寺垣博通賀鎮守府参謀長

加藤海軍省軍務局長殿



1287

横港機密第四二號

汽船歴山丸ヲ港務部所屬ト汽走水船

トシテ使用之我御允許相成度上申

本厚給水ノ欠乏ハ人テ更開陳スルノ西女ナシ而シ

テ号教艦艇入港スルトキハ附近港灣ヨリ市水ヲ

購入スルハ毎度ノ汝汰ニシテ過去一ヶ月間其額

約三千噸其價格式千四百円ノ巨額ニ達セリト

云フ爲メ主務廳於テモ此費用ヲ軽減セント

シテ苦心經營遂所屬曳船水船ヲ使用シ横

濱ヨリ運搬スルノ議已ニ起シ乙エリ然レトモ此等

用途ニ供シ得ル水船ハ二百噸内外ノモノ僅カニ

兩隻而カモ風浪女シク起ラハ運搬ノ至難ナル

水船
 西女ナシ而シ
 市水ヲ
 月間其額
 輕減セント
 使用ニ横
 一トモ止等
 モノ謹カニ
 乙五 難ナル

横濱根柢密着四二號ニ

別添上申ニ対スル搭載水量ニ并ニ蒸汽唧
 筒設備何所等ニ就テ尙取調報告
 可致候得共一取多ク候ニ付上申届
 提出致意次第ニ付御会ニ同直相成
 度此段申上テ奉也

明治三十九年七月五日

廣野樞府加賀海軍供務部長

寺垣樞府加賀鎮守府兵隊長殿

海軍

勿論為シ潮水混入シテ不台格ノ水タラシム
 ルコトアルハ豫期スルニ難カラス猶且ツ天候不
 良ノトキ三区ニ区ノ在泊艦艇ヲシテ往々給水
 ノ通ツ杜絶セシメ軍港ノ價値欠クアルハ昔
 港目下ノ状態ナリト然ルニ今般當府へ転籍ノ
 汽船歴山丸ハ之等用途ニ最モ適切ナル船質
 ヲ具備シテ許ノ設備ヲ施シハ確實目的ヲ
 遂行シ得テ刻下ノ窮態ヲ救済シ得ベシ右
 ニ付確シル搭載水量ハ調査ノ上ナラテハ新
 為シ難キモ四百噸以下ノコトハ無カル又設備
 トシテ一時向一百五十噸内外ノ給水カアル蒸汽
 唧筒一台ハ蒸備シ船艙内ニフセメント塗方等
 若干ノ蒸備手入等ヲ施シハ足リト思科ス

今及々本船一回ノ運搬量四百噸トシ従来ト其
 経費ヲ対比スルニ乗負ノ手寄航海用ニ寄
 せり今乗負ニテ優ニ一百円内外ヲ以テ足ルトセハ二百
 円ノ剩餘ヲ見ル之ヲ前例三千噸ノ價格二千
 四百円ニ対シ見ルニ僅カニ九百円ヲ以テ足り殆ント三
 分一ノ費用ニ過キス且之等利害同係ヨリ斯船ノ貢
 納ニ所極ソテ大ナリトセハ此際是非トモ本上申
 御採用相成度止段上申一候也

明治三十九年七月五日

横濱智恵海津港務部長 鹿野勇之進

横濱智恵鎮守府司令長官上村元之丞 殿

海軍

六等

軍務局員

案

先般歴史的潜水艇の母艇下を必要とする
計費を費等考古に於ては上可調方、作艦政本
部より、指匠契王殿に照會致し、今迄は何等
指匠に之を回看すべし、在後、自給延期の如く、
此の作日、僅に方艦政本部に云渉致し、甚と尚費
有るを工部、及び運使等、精々、監督に、指匠に、
の上、好都合とあり、右法、考す、申達致す

早五年十月十日

岡田白久

大村新一潜水艇司令部宛

(北村海)

潜水艇

軍務局

局員

横鎮第八八六號

三

供覽

總政本部

第三部長

軍令部

第一

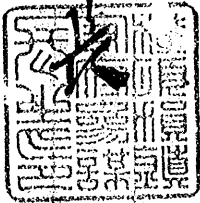
第一班
第二班

横鎮第一〇九號

某潜水艇隊潜水艇准中線以上ヲ白
色ニ塗換据取キリ以テ同隊司令ヨリ別
紙寫ノ函ヲ函出候奉清参考ノ指メ別
及以送付付

明治三十九年七月十日

寺垣横次賀鎖身所長 謹啟



海軍省軍務局長殿



七三

1293

7-18

一號潜水艇

寫

潜水艇隊潜水艇現在水線以上鼠色塗リト
 當艦隊潜水艇現在水線以上鼠色塗リト
 致シ居候馬夏季節中艦内温度極メテ
 高昇シ殊ニ渠中ノ如キ近來ニテモ晴天
 白日既ニ華氏九十五度内外トナルモ有之
 二次電池ハ其保存上華氏百度以内ニ保
 ツ必要アルス如キ場合ニ殆ソト課電
 ヲ為スヲ能ハサルニ至ル義ニ候尚漸次暑
 氣ヲ増ストキハ艦内温度百度内外
 ニ至ルコトモアラシカト被右候付テハ潜水艇

鐵板 吉水印刷所製

金邑持三街制定相成造水凖線也
二奎ノ換候条以設及街届矣也
明治三十九年七月九日

於横須賀

第一潜水艇隊司令松村純一

横須賀鎮守府參謀長寺垣楯三殿

1295

大正 陸

陸



軍務局

陸軍部

陸軍部

軍令部長



陸軍部

陸軍部

陸軍部

陸軍部



陸軍部

陸軍部

潜航艇隊の訓練に關する資料の整理
本日より本隊の潜水艇の訓練第一回
の資料の整理に於て其結果を
局員

會計課長



第三部長



第四部長



1296



1297

大臣

供覽

軍務局

機密本部

第四部

軍令部

部

抄

大五郎

青

多ふ好のりる... 後... 長

長

長



軍務局 機密本部 第四部 軍令部

電 報 送 達 紙

局	着	局	發	受 信 人 所 居 名
取 扱 者	受 信	付 午 前	第 三	電 報
<i>(Handwritten)</i>	後 午 前	後 午 前	ス	<i>(Handwritten)</i>
	時 分	時 分	日 號	

おへニフガ
 日ウイトモセ
 シフヤナソノ
 カヨウヨウミ
 フクニヤコシ
 ウキヨノウエ
 コトニケツス
 才ソテチカラク

定 指
 事 記

注 意	受 信 人 所 居 名
他人へ宛タル電報ノ配達ヲ受ケタルモノハ此山ヲ符 號シ直テニ此レヲ配達シタル電信局所へ返戻スベシ 天シテ其受取本人へ直送シ又ハ手渡シスベカラズ	<i>(Handwritten)</i>